
怪獣大戦争 1 9 4 5

ミニプリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪獣大戦争1945

【Nコード】

N3507S

【作者名】

ミニプリ

【あらすじ】

再び趣味全開の作品であります。異界の防人では怪獣は顔見せ（資料映像出演）ですが、こちらの作品では実物が出現するので苦手な人は絶対に見ないで下さい。また、GL描写もあるので苦手な人は絶対に見ないようにして下さい。

あらすじ

1945年5月、世界中に突如として多数巨大生物が出現しネウロ

イとの死闘を続ける世界は大混乱に陥ってしまうが、X星人と名乗る集団が混乱を終息させ、人類との友好条約締結を求めて来る。

一方ウィッチ達とは異なる時空の世界の日本では度重なる怪獣の襲撃に対抗する為、特殊戦略作戦室が中心となって特殊戦術機動集団「ゴジラ・コマンド」が編成された。

編成されたゴジラ・コマンドは異常な電磁障害が発生した海域を調査すべく派遣されるが、突如として発生した電磁障害に巻き込まれ、ストライク・ウィッチーズの世界へと時空跳躍させられてしまう。

金色の翔龍王・ペテルブルク襲撃1…出現…（前書き）

当作品のオープニング・テーマは「怪獣大戦争」タイトル・マーチ
（自衛隊マーチ）で宜しく願います。

金色の翔龍王・ペテルブルク襲撃1…出現…

1945年5月21日オラーシャ連邦ペテルブルク周辺空域

澄み切った蒼空から漸く訪れた春の陽射しが、雪と氷に閉ざされていた大地へと降り注ぎ、陽射しを浴びた若草と鮮やかに咲き乱れる堇の花が薫風を受けて漣のようにゆれている。

長い冬の末に訪れた短い春が息吹くオラーシャの大地の上空を、扶桑皇国海軍の傑作大型飛行艇である二式大艇が、搭載された4基の「火星」二二型1850馬力空冷エンジンの轟音を響かせながらオラーシャ北部の人類最大の拠点ペテルブルクへ向けて飛行を続けていた。

同地には異形の敵ネウロイとの戦闘の為に編成された第502統合戦闘航空団「ブレイブ・ウィッチーズ」が展開しており、オラーシヤ方面のネウロイと激闘を繰り広げている。

ブレイブ・ウィッチーズは迎撃を主任務としている他の統合戦闘航空団と異なり、ネウロイに対して積極的に攻勢をしかける部隊である上に多大な戦果と引き換えに多数のストライカー・ユニットを消耗させて行く三名のエース・ウィッチ、通称「ブレイク・ウィッチーズ」が存在する為に弾薬・ストライカー・ユニットの消費と損耗が激しい為頻繁な補給活動が必要であり、飛行中の二式大艇も弾薬や整備用の予備パーツ等を満載してペテルブルクへと向かっているのだ。

「後30分程でペテルブルクに到着します。」

二式大艇のコクピットで航法士からの報告を受けた機長は、小さく頷くと共に傍らの操縦士に向けて口を開いた。

「もうすぐ目的地のペテルブルクだ。」

「了解…」

操縦士が応答した瞬間、電探室から電測員の緊張した声が機長の耳

のレシーバーに流れ込んで来た。

「電探に感あり、前方1万2千に巨大な反応が突如発生しました。」
「ネウロイか!？」

「分かりません、何の前触れも無く突然現れました。」

操縦士は、機長と電測員が会話を続けている火星の出力を上昇させ
二式大艇の速度を上昇させ、電探員との会話を終えた機長は二式大
艇に搭載された防御火器の射撃体勢を整えさせた。

臨戦態勢を整えた二式大艇の操縦席が緊迫した雰囲気にもまれる中、
機長達の後方で周囲の警戒にあたっていた航法士が緊迫と困惑の入
り雑じった声をあげた。

「機長!! 2時の方向、不審な閃光が発生しています!!」

機長が報告のあった方向に視線を向けると、蒼空の一角で眩い閃光
が閃き、強烈な光を放っているのが確認された。

「全速で離脱する。通信士ブレイブ・ウィッチーズに通信準備!!」

機長の命令を受けた操縦士が操縦桿を操作して離脱を図ろうとする
が…

「…!!? 操縦桿が動きません!!」

「何だと!？」

操縦士の言葉を受けた機長が自分の操縦桿を操作しようとするが、
操縦桿は全く動かず、機長が渾身の力で動かそうとしても微動だに
しなかった。

「エンジン出力最大! 水噴射も使え!!」

機長の指示を受けた操縦士が、火星のエンジン出力を上昇させつつ
パワー・ブーストとして装備されたカールスラント製の水・メタノ
ール噴射装置MW50を使用する。

操縦士の操作を受け、4基の火星が轟然と唸るが二式大艇の巨体は
蜘蛛の巣に絡め取られた様に動こうとしなかった。

「どう言う事なんだ…これは!？」

機長が困惑の声と共に操縦桿を操作していると、閃光を監視してい
た航法士が驚愕の叫びをあげる。

「な、何だアレは！！」

「どうした！！」

航法士の叫びを受けた機長が閃光の方向に顔を向け、双眼鏡で閃光を確認すると閃光の強度が徐々に低下し、光が何かの形を成して行くのが確認された。

光の塊であつたソレが徐々に正体を露にしていくなを確認した機長は、表情を強張らせながら機内通信で通信士を呼び出す。

「通信士、ブレイブ・ウィッチーズに緊急連絡、ペテルブルグ周辺空域に正体不明の飛行物体が出現！とてつも無く巨大な…う、ウワアアアア！！」

機長の絶叫と共に雷を思わせる三条の光線が二式大艇体に叩き込まれ、爆煙に包まれた機体が粉微塵に爆砕される。

爆煙と破片が飛散する中、蒼空を震わせるような巨大な咆哮が上がり、巨大な何かが漂う爆煙を突き抜けて前進を始めた。

透き通る様な蒼空を切り裂くように一条のコントロール（飛行機雲）が出現し、ペテルブルグ目指して一直線に突き進んで行った…。

同空域上空

「あんな旧式軍用機が脱出出来る物が…」

一連の情況が映し出されていたモニターの前に佇み一部始終を確認していた長身の男性が侮蔑の呟きをもらしつつ嘲りの籠った笑い声をあげ、傍らに控える副官らしき男性が頷きながら口を開く。

「どうやら当初侵攻予定であつた世界と比べても一段と低い技術レベルしか存在していないようですね…」

モニターの前に佇む男性が副官らしき男性の言葉に頷いていると、二人の後方の司令官席と思わしき席に座っていた壮年の男性が静かに口を開いた。

「だからこそ、我々の技術力に対する畏怖の念が強くなり、我々の行動がより容易な物となる訳だ。」

その言葉を耳にした男性はサングラスの下の目を険しくさせながら言葉を返した。

「我々はこの世界の技術力の差は圧倒的な物です…統制官の仰る婉曲的な計画では無く、直接的な計画を行った方が手っ取り早いのは無いですか？」

統制官と呼ばれた壮年の男性はその言葉に対して、柔和な笑みを浮かべながら諭すような口調で言葉を返す。

「無駄な衝突を避けられるならばそれに越した事は無い…力で押さえつけるだけが支配では無いのだよ…」

「……分かりました」

統制官の言葉を受けた男性は短く答えるとモニターへと視線を向け、統制官も頷きながら同じ様にモニターを見据えた。

モニターを見据える彼等の瞼はただの一度も瞬きをせず、見開かれた水晶体がモニターの光を浴びて鈍い輝きを放っていた。

1945年5月21日

異形の敵ネウロイと死闘を続けていた人類は、この日より新たな脅威との死闘を余儀無くされる事となった。

金色の翔龍王・ペテルブルグ襲撃2…接触…（前書き）

趣味全開の作品ですが宜しく願いますm（―）m

金色の翔龍王・ペテルブルグ襲撃2…接触…

ペテルブルグ周辺空域

二式大艇が撃墜され、それと相前後して正体不明の飛行物体が出現したとの報告は、直ちにペテルブルグのブレイブ・ウィッチーズの基地へと送られブレイブ・ウィッチーズ隊長のグンドゥラ・ラル中佐は、周辺空域で実弾訓練を実施中であつたブレイブ・ウィッチーズ戦闘隊長アレクサンドラ・I・ポクルイーシキン少佐とブレイク・ウィッチーズを先発隊として前進させるべく通信を送り、それを受けたアレクサンドラは、ブレイク・ウィッチーズと共に指示された空域へ向けて前進を開始した。

「現在、二式大艇を撃墜したと思われる飛行物体は、ペテルブルグ目掛けて一直線に飛行中よ、私達の任務は飛行物体の正体の確認及び迎撃と言う事になるわ。」

アレクサンドラは後方のウィッチ達にそう伝えたと速度を上げる為に自身の両足に装着されたストライカー・ユニット、M i g i ー 2 25に搭載されたA M ー 42B魔導エンジンの出力を上昇させ、それに呼応して回転数を上げた魔導プロペラが発生させた推力が、オラーシャ連邦空軍の軍服と黒ストッキングに包まれた肢体を前へと押し進めて行く。

加速して行くアレクサンドラの緩やかなウエーブを描く淡いブロードのロングヘアの間からストライカー・ユニット装着の証である北極熊の耳が覗き、臀部では北極熊の尾が風に靡いている。

アレクサンドラが加速を開始して暫くするとブレイク・ウィッチーズの一員である菅野直枝中尉が彼女の傍らへ並びけて来た。

直枝の両足に装着されたストライカー・ユニット、紫電二一型に搭載された誉二一型魔導エンジンが轟然と唸り、発生した推力を受けたボディースーツ（スク水ではありません）と飛行服と言う装いの

小柄な肢体が推し進められ、短めのセミロングの黒髪と臀部から覗くブルドックの耳と尾が風を受けて静かに靡いている。

「隊長」

アレクサンドラがインカムから流れる直枝の声を受けてサファイア・ブルーの瞳を傍らの直枝の方へ向けると、直枝は鮮烈な光を宿した黒曜の瞳でアレクサンドラの視線を受け止めながら口を開いた。

「正体不明ってどう言う事なんだ？二式大艇を撃墜したのはネウロイじゃないのか？」

アレクサンドラは直枝の言葉に対して小さく頷きを返しつつ、口を開いた。

「二式大艇が撃墜される寸前にレーダーに正体不明の反応が出現し、その直後にブレイブ・ウィッチーズの基地に二式大艇から緊急通信が送られて来たわ、正体不明の飛行物体が出現とてつもなく巨大、通信はここで途切れ、二式大艇はレーダーから消失したとの事よ。」アレクサンドラの言葉を受けた直枝が鋭い表情のまま頷いていると、後方からDBー605DM魔導エンジンのエンジン音が響き、それと同時に、両足にストライカー・ユニット、Bfー109Kー4を装着したヴァルトルト・クルピンスキー中尉とニッカ・エドワーディン・カタヤイネン曹長の二人が、アレクサンドラ達の傍らへと並びかけて来た。

「ネウロイじゃないとしたら、その飛行物体の正体は何なんでしょうか？」

スカイブルーの軍服に白ストッキングと言う装いに身を包み、フェレットの耳が覗くショートカットの金髪と澄んだ碧眼のボーイッシュな美貌が特徴的なカタヤイネンが眉を潜めさせながら呟くと、肢体を包み込むライトブルーの軍服と黒ストッキングと、金系のショートヘアと深い輝きを放つ藍色の瞳の整った目鼻立ちが人目を惹くクルピンスキーが、ショートヘアから覗くワイマラナーの耳を風に靡かせながら口を開いた。

「出現するなり問答無用で二式大艇を撃墜した奴だからねえ、余り

友好的な奴ではなさそうだね…」

「…ああ」

クルピンスキーの言葉を受けた直枝は、頷きながら短く返答すると、前方を見据えながら言葉を続けた。

「仇はオレがとる…」

紡がれる迷い無き言の葉を受けたクルピンスキーとカタヤイネンは小さく頷きながら直枝の傍らへ点位し、それを見たアレクサンドラは小さな微笑を浮かべつつその様子を見詰めていたが、その胸中の片隅では、二式大艇から送られた緊急報告が幾度と無く反芻されていた。

（正体不明の飛行物体、とてつも無く巨大…二式大艇は、一体何を見たと言うの？）

アレクサンドラが微かな疑念を浮かべながら報告文の一部を反芻していると、前方に進み出た直枝が此方に向けて前進してくる何かを発見し、口を開いた。

「発見したぞ…！」

直枝の声を受けたアレクサンドラが直枝が示した方向を確認すると、蒼空の一角に小さな点のような物が存在しているのが確認された。

「接近する。各自は十分注意して…」

「了解、二パ君、ナオちゃん行くよー」

アレクサンドラの命令を受けたクルピンスキーが飄々とした口調でカタヤイネンと直枝を促しながら前方へと進み、アレクサンドラが三人の背後に点位しバックアップの態勢に入りつつ抱えていたPTST1941対装甲ライフルのコッキング・レバーを操作し14・5ミリ弾を薬室へ送り込む。

アレクサンドラの行動に相前後してクルピンスキーとカタヤイネンも自身が装備するMG151/20の薬室にカールスラント製特殊炸裂弾M - ミーゲンヨス g e s s h o s sを送り込み、直枝も九九式二号二型改に12・7ミリ弾を装填する。

戦闘態勢を整えたウィッチ達は接近してくる飛行物体を見据えつつ

前進を続けたが、飛行物体の姿が徐々にその大きさを増して行くのに従い、その表情が驚愕と困惑に彩られていった。

「…な、何なのアイツ…」

「嘘だろ…」

「ニパ君、ナオちゃん、落ち着いて…」

カタヤイネンと直枝が驚愕の声をあげ、クルピンスキーは二人を落ち着かせようと声をかけたが、その表情は今まで誰も見た事が無い程厳しい物となっていた。

（あれが、飛行物体の正体なの…）

直枝達の後方のアレクサンドラは胸中で呟きながら驚愕と困惑の入り雑じった表情を浮かべながら接近してくるソレを見詰めた。

ソレはウィッチ達の眼前で蒼空を切り裂くように前進し、コントロールの軌跡を澄み切った蒼空に刻み込んでいた。

巨大な胴体からどつしりとした2本の脚が伸び、2本の尾が風を受けてゆったりと靡いている。

その巨軀の中でも一際異彩を放つ盛り上がった胸筋に支えられた巨大な翼が蒼空を切り裂くように羽ばたき、巨体を軽々と推し進めている。

異彩を放つ巨体からは三本の長くしなやかな首がのび、その先端には鋭い牙を持ったドラゴンを彷彿とさせる頭部が存在し、周囲に睨みを効かせている。

圧倒的なまでの存在感を示す巨体は金色の鱗に覆われ、陽射しを浴びて燦然と輝いている。

蒼空を支配するかのように進む金色の巨龍は接近するアレクサンドラ達に気付くと、三本の首を彼女達へ向けた。

「早速出てきたようだな…」

遙か上空からその様子を確認していた黒装束の男性が発した呟きを受け、傍らに控えた男性がモニターを操作しながら口を開く。

「協力者の資料によりと接触して来たウィッチは第502統合戦闘航空団「ブレイブ・ウィッチーズ」戦闘隊長のアレクサンドラ・I・

ポクルイーシキンとブレイブ・ウィッチーズでも最も攻撃的なブレイク・ウィッチーズと呼ばれるウィッチ達と思われます。」

副官の言葉を受けた男性は、満足そうに頷きつつ言葉を発した。

「統合戦闘航空団の中でも最も攻撃的な部隊ブレイブ・ウィッチーズ、どれ程の物が確めさせて貰うとしよう…戦闘を開始しろ、余り速度は出すな…速度を出し過ぎればウィッチ達がついて来れなくなるからな…」

男性の言葉を受けた副官が恭しく頭を下げ、それを確認した男性はモニターに映る金色の龍を見据えながら口を開いた。

「行け、キングギドラ」

男性の命令が発せられた瞬間、金色に輝く三つ首の龍、キングギドラは接近するウィッチ達目掛けて激しい咆哮を浴びせかけ、轟く咆哮が蒼空に響き渡った。

金色の翔龍王・ペトルブルク襲撃3…空戦…（前書き）

ユニークアクセス500突破およびPVアクセス1500突破あり
がとございます（（^^^;）

後書きにてキングギドラのデータ及び現時点での登場予定怪獣並び
登場予定装備（対怪獣用）を紹介致します。

金色の翔龍王・ペトルブルク襲撃3…空戦…

「宣戦布告、と言った感じかな…」

「その様ね…」

蒼空に響き渡るキングギドラの咆哮を耳にしたクルピンスキーが厳しい表情のまま呟き、アレクサンドラは同意の言葉を返しながら無線機のインカムを操作して基地で出撃準備に勤しむラルを呼び出した。

「ラル、こちらアレクサンドラ、聞こえている？」

「ええ、聞こえているわ、こちらは間もなく緊急発進の予定よ。状況はどう？」

ラルの返答を耳にしたアレクサンドラは、キングギドラを見据えながら厳しい口調で言葉を続けた。

「ラル、よく聞いて頂戴、正体不明の飛行物体の正体は全長約140メートル、翼長約150メートルの三つ首のドラゴン型の巨大生物よ…」

「ドラゴン!？」

予想外の報告を受けたラルが困惑の声をもらすが、アレクサンドラは何時もの冷静な口調で言葉を続ける。

「私も未だに信じられないわ、でもソイツは今も私達の眼前で飛行しているの…」

「…了解した。」

ラルが一瞬の沈黙の後に返して来た言葉を受けたアレクサンドラは、PTSTの銃先をキングギドラへと向けながら言葉を続けた。

「攻撃を開始するわ」

「了解した。出来る限り早く発進する。気をつけてね」

「了解」

ラルとの通信を終えたアレクサンドラは一拍の間を置くと、前方を進むブレイク・ウィッチーズに向けて口を開いた。

「攻撃を開始するわ、私がPTSTで先制攻撃を仕掛けるからそれと同時に攻撃を開始して頂戴、相手の能力は未知数よ充分に注意しなさい…」

「了解!!」

ブレイク・ウィッチーズからの返答を耳にしたアレクサンドラは、流れる様な動作でPTSTの射撃態勢を整えると、迫り来るキングギドラを見据えつつ口を開いた。

「攻撃開始!!」

攻撃開始を告げたアレクサンドラの長くしなやかな指先がトリガーを操作すると、蒼空に銃声が轟き、PTSTの銃口からマズル・フラッシュの閃きと共に14・5ミリ弾が迸り出る。

発射された14・5ミリ弾は突き進むキングギドラに吸い込まれる様に着弾し、着弾を意味する火花が巨体の片隅で小さく爆ぜ、それを確認したクルピンスキーは静かに口を開いた。

「行くよ、ナオちゃん、ニパ君」

その言葉と同時に、クルピンスキーが突撃を開始し、それを確認したカタヤイネンと直枝が速度を上昇させてその動きに続く。

クルピンスキーとカタヤイネンのDB605DMと直枝の誉二型が出力を上昇させ発生した推力が三人の肢体をグングンと押し進めて行く。

三人がキングギドラに接近する間に、アレクサンドラが第2射、第3射、とPTSTの射弾を矢継ぎ早に浴びせかけ、キングギドラの巨体に直撃弾を示す閃光が刻み込まれるが、キングギドラは撃ち込まれる14・5ミリ弾を回避する素振りすら見せずに飛行を続けていた。

「余裕綽々…」といった様子だね」

キングギドラの様子を確認したクルピンスキーは厳しい表情を浮かべながら呟くと、後方のカタヤイネンと直枝に声をかけた。

「ニパ君、ナオちゃん、攻撃を開始するよ。」

「了解!!」

クルピンスキーの言葉を受けた二人は叩きつける様に応答すると、左右に別れてキングギドラに突撃を開始し、それを確認したクルピンスキーもDB605DMの出力を限界まで上昇させて続く。

三方に別れたブレイク・ウィッチーズが急激に接近してくるキングギドラの巨体に各々が装備する火器の銃先を指向してトリガーを操作すると、銃口からマズル・フラッシュの閃光が迸り、曳光弾の軌跡がキングギドラへと吸い込まれて行った。

クルピンスキーとカタヤイネンのMG1151/20から発射されたM-geshossがキングギドラの巨体のそこかしこで炸裂し、直枝の九九式二号二型改から迸り出た12・7ミリ弾が雨となって降り注ぎ、金色の巨軀に火花を発生させた。

ブレイク・ウィッチーズ達が激しい射撃を浴びせつつキングギドラと擦れ違った刹那、彼女達を援護する為にアレクサンドラが放った14・5ミリ弾がキングギドラの中央の頭部を直撃し、キングギドラは中央の首を微かに振りながら怒りの咆哮をあげた。

ブレイク・ウィッチーズはその間に反転すると高速でキングギドラの背後に接近すると、猛烈な射撃を浴びせかけた。

降り注ぐ射弾を浴びたキングギドラの背中に無数の閃光と火花が発生するが、キングギドラは何事も無かったかの様に平然とした様子で飛行を続けていた。

「くそ、なめるなよ!!」

キングギドラの様子を見た直枝が呪詛の呟きをもらしながらキングギドラに更に接近しながら九九式二号二型改の射撃を浴びせ、クルピンスキーとカタヤイネンもそれに倣ってキングギドラとの距離を詰めながらM-geshossの射弾を浴びせる。

（何てヤツなの、まるで効いてる様子が無い…）

アレクサンドラがP.T.S.Tのマガジンを交換しながら内心で呟いていると、射弾を浴びながら前進を続けていたキングギドラが新たな行動を起こした。

それまで直進飛行を続けていた巨体が一気に速度を落としそれと同

時にキングギドラの上半体が突然起き上がり、接近しているブレイク・ウィッチーズの眼前に巨大な壁となって現れる。

「……！！！」

急接近していた三人は咄嗟に散開して激突する事だけは免れたものの、突然の急減速によって陣形を崩された上にキングギドラの眼前へとオーバーシュートさせられてしまう。

ブレイク・ウィッチーズ達を捉えたキングギドラの三つの頭部が鋭い牙の並んだ口を開き、刹那の間を置き口から稲妻を彷彿とさせる光線が迸りブレイク・ウィッチーズへと降り注ぐ。

クルピンスキーと直枝は咄嗟に散開してキングギドラの放った光線を辛うじて避ける事に成功するが、二人を捉えられなかった光線が自分に撃ち込まれた光線を回避したカタヤイネンに襲いかかり、その内の一つがカタヤイネンを捉えた。

「……ッゲ！？……嘘っ……何て威力なの！？」

カタヤイネンは咄嗟に魔導シールドを展開させて光線を防ぐが、予想を遥かに上回るキングギドラの光線の威力に驚愕の声を上げる。

光線を受け止める魔導シールドから軋んだような音が上がり、急激な魔力消耗を受けたDB-605DMから悲鳴の様なエンジン音があがる。

光線を食い止める事が精一杯で釘付けにされたカタヤイネンに対してキングギドラは残る二本の首をゆっくりと向けて来た。

「……こ、このままじゃ……」

カタヤイネンが焦燥の呟きをもらす中キングギドラの二本の首がカタヤイネンを捉え、光線の発射態勢に入った刹那

「させるかよ！！」

「ニパ君を殺らせはしないよ！！」

嘗て二型とDB-605DMの高らかな咆哮と共に直枝とクルピンスキーが突撃して来ると、九九式二号二型改とMG-151/20の猛射を浴びせかけ。降り注いだ12・7ミリ弾とM-geshossがキングギドラの頭部に着弾し光線の発射を防ぐ。

それと同時にアレクサンドラのPTSTから放たれた14・5ミリ弾がカタヤイネンに光線を浴びせていたキングギドラの頭部を直撃し、カタヤイネンはその間にどうにか離脱を成功させる事が出来た。

「……はあ、はあ」

「ニパ君、大丈夫かい？」

離脱したカタヤイネンが急激な魔力消費に荒い息をついていると、傍らにクルピンスキーが近付いて来ると穏やかな口調で声をかけ、カタヤイネンは静かに頷きながら口を開いた。

「大丈夫です…ヤツの光線は凄まじい威力です、ネウロイの比じゃありません…」

クルピンスキーはカタヤイネンの言葉に対して頷く事で応じると、視線をキングギドラへと向けながら言葉を発した。

「とんで無いヤツだな、だからこそヤツをペテルブルグに入れる訳には行かない、行けるかニパ君？」

クルピンスキーの言葉を受けたカタヤイネンは小さく頷くと微笑を浮かべながら口を開いた。

「大丈夫です。伯爵」

力強い返答を聞いたクルピンスキーは微笑と共に頷くと、カタヤイネンと共にキングギドラ目掛けて加速して行き、単独で三度目の攻撃をかけようとしていた直枝と合流してアレクサンドラのPTSTの援護射撃を受けながら攻撃を再開した。

これに対してキングギドラは、降り注ぐ弾雨を浴びながらも全く堪えた様子を見せずに凄まじい咆哮をあげると、ウィッチ達目掛けて三つの頭部から光線を放って応戦する。

蒼空に幾条ものコントレールの軌跡が刻まれ、曳光弾の軌跡と光線が交差し、魔導エンジンのエンジン音とキングギドラの咆哮が澄んだ蒼空に響き渡る。

蒼空を揺るがす程激しい空戦の渦は何時果てる事無く続きながらも、徐々に、しかし確実にペテルブルグ目掛けて前進を続けていた。

金色の翔龍王・ペトルブルク襲撃3…空戦…（後書き）

宇宙超怪獣キングギドラ

身長140メートル

翼長150メートル

体重7万トン

主要武器

引力光線

トリプル・トルネード

ギドラ・ノヴァ（オリジナル技キングギドラ版体内放射）

踏みつけ攻撃他

紹介

ペテルブルグ周辺に突如として出現した巨大宇宙怪獣、圧倒的な戦闘能力を発揮しウィッチ、ゴジラ・コマンドを苦しめて行く事となる。

外見はVSシリーズ版キングギドラとなりますが主要武器にモスラシリーズで使用したトリプル・トルネードとオリジナル技のギドラ・ノヴァを追加しています。

登場予定怪獣（現時点）

宇宙超怪獣キングギドラ

サイボーグ怪獣ガイガン

大エビ怪獣エビラ

公害怪獣ヘドラ

巨大イグアナ（鮪ばっか喰ってるヤツ）

登場予定装備（対怪獣用・現時点）

機龍

機龍改（オリジナル機龍）

ガルダ

スーパ－X改^{オリジナル}

スーパ－X2（オリジナル設定有）

スーパ－X3

90式メーサー光線車

メーサータンク

ツイン・メーサータンク

MBF-X（オリジナルメーサー攻撃機）

M-6000TCSシステム

金色の翔龍王・ペテルブルグ襲撃4…迎撃態勢…（前書き）

物凄く今更ですが本作品にはGLが含まれております。このパートではGL描写もありますので苦手な人は絶対に見ないで下さい。

金色の翔龍王・ペテルブルグ襲撃4…迎撃態勢…

（このままではペテルブルグに侵入されてしまう…）

アレクサンドラは、止まる事無く進撃を続けるキングギドラに対して焦燥感を募らせながらP.T.R.S.Tの射撃を浴びせていたが、ウィッチ達の猛攻を浴びつつも平然と飛行を続けていたキングギドラが突然高度を下げ始めたのを確認すると困惑の表情を浮かべながら口を開いた。

「何をするつもりなの？」

アレクサンドラが困惑の呟きをもらしている頃、より接近した状態でキングギドラの不可解な行動を確認したブレイク・ウィッチーズも怪訝そうな面持ちを浮かべながら、高度を下げはじめたキングギドラの追跡を行っていた。

「どうしたんだアイツ、突然高度を下げ出したぞ…」

直枝が降下して行くキングギドラを厳しい表情で見据えながら呟くと、カタヤインンが困惑の面持ちのまま口を開いた。

「今までの攻撃がダメージを与えたのかな？」

「残念だけど望み薄だね…アイツはそんな生易しいヤツじゃなさそうだしね…」

半信半疑と言った口調のカタヤインンの言葉に対してクルピンスキーは冷製にその言葉を否定すると、前方のキングギドラを見詰めながらアレクサンドラに通信を送る。

「大尉、対空砲部隊だけじゃ無く地上部隊全体に緊急報告を送った方が良さそうだよ。」

「私も同じ意見よ、ラルを通じてペテルブルグ周辺の部隊に緊急連絡を行ったわ」

クルピンスキーはアレクサンドラの言葉に頷きつつ、降下して行くキングギドラの進路とペテルブルグ周辺の地形図を頭の中で重ね合わせる事でその降下地点を割り出すと、表情を更に厳しくさせなが

ら口を開いた。

「ヤツの降下して行く先はドゥーデルホーフ高地だね…」

クルピンスキーの言葉を受けた直枝とカタヤインンの表情が緊迫した物となる。

ドゥーデルホーフ高地はペテルブルグの南方約25キロの地点に存在する高地であり、ペテルブルグ最終防衛ラインの中心的存在でもある、そしてこの高地を突破されると言う事は巨大生物のペテルブルグ侵入を意味する事となるのだ。

「大尉、ヤツの降下ポイントは恐らくドゥーデルホーフ高地だ。」

「了解、ラル達にはドゥーデルホーフ高地上空に向かって貰うわ」
クルピンスキーの報告を受けたアレクサンドラは即座に返答を返し、それを受けたクルピンスキーはMG151/20を構えながら言葉を発した。

「行くよ、ニパ君、ナオちゃん…」

「おう!!」

「はい!!」

直枝とカタヤインンの力強い返答を受けたクルピンスキーは小さく頷くと二人と共にキングギドラを攻撃する為に速度を上昇させ、ラルへの報告を終えたアレクサンドラが三人を援護すべくPTRSTを構えながらそれに続いた。

ドゥーデルホーフ高地

アレクサンドラからの急報を受けたドゥーデルホーフ高地では同地の守備にあたるカールスラント陸軍第5近衛装甲師団「ヴィーキング」とオラーシャ連邦陸軍第1親衛戦車軍が大わらわで迎撃態勢を整えていた。

周辺に重々しいエンジン音が鳴り響き、ヴィーキング師団の第5近衛装甲連隊「ヴィーキング」のパンテル(？号戦車)G型と？号戦車H型、更に第1親衛戦車軍の4個戦車旅団に所属するT34

85とM14A3E8（イージー8・レンドリース供与リベリオン製）が戦車用射撃壕へと進入し主砲の砲先を前方へと向ける。

一方対空砲陣地では、対地上ネウロイ戦においても大きな威力を発揮するカールスラント製88ミリ高射砲FLAK41と、オラーシヤ製85ミリ高射砲ZIS-53に操作要員が群がり射撃態勢が整えられている。

またドゥーデルホーフ高地の最高点である167高地、通称はげ山では第5近衛装甲砲兵連隊の観測隊が観測作業を行い、後方で射撃準備に勤しむ105ミリ自走砲「ヴェスぺ」と150ミリ自走砲「フンメル」に射撃データを送る。

慌ただしく戦闘準備を整えているヴィーキング師団の司令部では、師団長のヘルベルト・オットー・ギレ中将が作戦参謀からの報告を受けていた。

「ヴィーキング装甲連隊及び第5近衛装甲砲兵連隊の戦闘配置が完了しました。第5近衛装甲猟兵大隊の戦闘配置も間もなく完了します。また、オラーシヤの第1親衛戦車軍も殆ど戦闘配置を完了した模様です。」

ギレは作戦参謀の言葉に頷くと、蒼空の一角に困惑の表情を向けながら口を開いた。

「三つ首のドラゴン型巨大生物…か」

「いささか信じ難い話ではありますが…」

ギレが作戦参謀の発した困惑混じりの返答を受けながら頷いていると、司令部要員の一人が空を指差しながら弾んだ声をあげた。

「ブレイブ・ウィッチーズです！」

その言葉を受けたギレ達が上空に視線を転じると、四条のコントロールが蒼空に鮮やかな軌跡を描きながらこちらに接近してくるのが確認された。

ドゥーデルホーフ高地上空

「地上部隊の迎撃態勢はほぼ完了しているような」

ブレイブ・ウィッチーズ隊長のグンドウラ・ラル少佐はそう呟くと、戦闘態勢を整えている地上部隊を見渡した。

両足に装着されたB f ー109 K ー4のDB ー605DM魔導エンジンが軽やかに唸り、軍服とその上から装着した黒いコルセットに白いズボン（パンツじゃないから恥ずかしいもん！）と言う装いに包まれた均整のとれた肢体を推し進めている。

静かに煌めくブルー・アイと共に彼女の美貌を引き立てているセミロングの赤毛の髪と臀部から伸びる狼の耳と尾が風を受けて小さく靡いている。

地上部隊の様子を一通り確認したラルが視線をキングギドラが来襲してくるであろう方向に向けていると、DB605DMのエンジン音が響き共に、戦友のエディータ・ロスマン曹長がキツネの尾と耳を靡かせつつラルの横へと並びかけて来た。

銀系となって摩く銀髪のロングヘアーと落ち着いた光を宿すアメジストの瞳が特徴的な彼女の美貌は、静寂に溢れた湖を彷彿とさせ、黒い軍服と白いズボン（ズボンと言ったらズボンです）に包まれた華奢な肢体と合わさりどこか物憂げで儂い印象を見る者に与えていた。

「そろそろヴァルディ達と巨大生物が確認出来る筈よ」

ロスマンの言葉を受けたラルは頷く事でそれに応じると、後続するジョーゼット・ルマール少尉（ジョーゼット）と下原定子曹長に視線を送りながら口を開いた。

「ルマール、定子、準備はいいわね？」

「はい！」

「大丈夫です」

ラルの言葉を受けたルマールと定子は、瞳に力強い光を宿しつつ答えを返した。

ルマールのストライカーユニットVG・39biss2に装着されたクワドラ12Zー89魔動エンジンと定子の紫電二一型の誉二一型

魔動エンジンが軽やかな唸り声をあげ、発生した推力が二人の肢体を前方へと推し進め、ルマールのペルシャ猫の耳と尾に定子の扶桑ウサギの耳と尾が風を受けて靡く。

二人の言葉を受けたラルが大きく頷きながら視線を前方に戻すと、ルマールは視線を傍らの定子へと移しながら口を開いた。

「定子さん、気を付けてね…」

ルマールの言葉を受けた定子が視線を向けると、優しい光を宿したルマールのサファイヤ・グリーンの瞳が視界に飛び込んで来た。

「はい、ルマールさんも注意して下さいね」

定子が穏やかな口調で返答を返すと、ルマールは小さく頷きながら定子の傍らへと近付くと、少し遠慮がちに自分の手を定子に向けて差し出した。

それを確認した定子は穏やかな微笑^{えみ}を浮かべながら自分の手を伸ばし、二人の指先が絡みあう。

ルマールのサファイヤ・ブルーの瞳と定子の黒真珠の瞳が互いの姿を写し合い、絡め合った指先が固く握り合い愛^{いと}しき女^{ひと}の存在を感じ合う。

二人が刹那の間握り合った手を放し、小さく頷き合った瞬間、ラルの緊迫した声がインカムにもたらされた。

「どうやら御出座しのような」

その言葉を耳にしたルマールと定子が視線を向けると、キングギドラがブレイク・ウィッチーズとアレクサンドラの攻撃を物ともせず
に降下してくるのが確認された。

金色の翔龍王・ペテルブルク襲撃5…龍王の猛威…（前書き）

PVアクセス3000突破及びユニーク1000突破、ありがとうございます（^^;）

GL描写もそれとなくあるので苦手な人は注意して下さい。

金色の翔龍王・ペテルブルク襲撃5…龍王の猛威…

「…成程、生半可なヤツでは無さそうだな…」

キングギドラの姿を見たラルは厳しい表情を浮かべながら呟くと、攻撃を続けるアレクサンドラ達に向けて通信を送った。

「サーシャ、攻撃を中止して我々に合流しなさい、地上部隊と呼応して総攻撃をかける！！」

インカムから流れるラルの言葉を受けたアレクサンドラは、PTRSTをキングギドラ目掛けて発射しながら言葉を返す。

「了解しました少佐、直ちに離脱します。」

アレクサンドラはラルとの交信を終了すると、ブレイクウィッチーズに向けて命令を発した。

「総員、一時攻撃中止！ラル少佐達と合流した後に地上部隊と共に総攻撃を実施します。」

アレクサンドラの命令を受けたクルピンスキーはキングギドラの状態を確認し納得した様に小さく頷くと、キングギドラの近くから離脱を始めつつ直枝とカタヤイネンに向けて通信を送った。

「ナオちゃん、ニパ君、聞こえたかい？悔しいけど妥当な判断だ。」

「一旦離脱するよ…」

「チッ…了解！」

「…了解です。」

直枝とカタヤイネンが応答しつつクルピンスキーに続くと、三人の離脱を援護する為にアレクサンドラがPTRSTを発射し、撃ち込まれた14・5ミリ弾がキングギドラの巨体に火花を散らす。

ブレイク・ウィッチーズの離脱を確認したアレクサンドラが続けて離脱しラル達と合流すべく前進を開始するのに相前後する形でキングギドラがオラーシャの大地へ降り立ち、どっしりとした脚が大地を捉えた瞬間に小さな地響きが発生して展開する地上部隊が微かに震える。

しなやかな三つ首が思い思いの方向を向き、三方向に向けて巨大な咆哮が轟き、それを合図としたように金色に輝く巨体がドゥーデルホーフ高地目掛けて前進を開始した。

「何て奴だ……」

師団司令部からキングギドラの姿を確認したギレが双眼鏡を向けたまま呟くと、傍らの作戦参謀が同意するように頷きながら口を開いた。

「間もなく砲兵隊の射撃エリアに侵入します。」

ギレがその言葉に頷いている間にもキングギドラは前進を続け、攻撃開始ラインへと脚を踏み入れ、それを確認したギレの口から命令が発せられた。

「砲撃開始……」

ギレの命令は直ちに後方に展開する第5近衛装甲砲兵連隊へと伝えられ、砲撃態勢を整えていたヴェスペの10・5センチ1eFH18軽榴弾砲とフンメルの15センチsFH18重榴弾砲の砲口から砲煙と閃光が迸り、発射された榴弾がキングギドラの周辺に降り注ぎ炸裂する。

炸裂弾の衝撃が大地を揺るがし爆煙が周囲を覆う中、キングギドラの金色の巨体に直撃弾を示す閃光が弾け巨体が微かに揺らぐ。

第2射、第3射……ヴェスペとフンメルは矢継ぎ早に射撃を行い、キングギドラに凄まじい砲撃を浴びせかけるが、キングギドラは凄まじい咆哮と共に降り注ぐ榴弾を物ともしない様子で前進を続ける。

「……バケモノめ」

キングギドラの様子を確認したギレが呟きをもらす中、キングギドラは更に前進を続け、対空砲部隊と装甲部隊の攻撃開始ラインへ到達した。

「……攻撃開始……」

展開する部隊のそこかしこで指揮官達の号令が発せられ、刹那の間と共に攻撃が開始された。

FLAK41とZIS-53の砲口からオレンジ色の発砲炎が迸り、

発射された徹甲弾が低伸弾道でキングギドラに叩き込まれ炸裂する。パンテルG型の長砲身75ミリ戦車砲KWK42と？号H型の75ミリ戦車砲KWK40L/48、T-34-85の85ミリ戦車砲ZIS-S-53、更にM4A3E8の76・2ミリ戦車砲M1A1から発射された徹甲弾と徹甲榴弾も雨となってキングギドラに降り注ぎ、炸裂弾の閃光が金色の巨体を覆う。

「今だ、攻撃開始！！」

上空から状況を確認していたラルが攻撃命令を発し、それを受けたブレイブ・ウィッチーズは攻撃を開始した。

「いっくぜ！！」

真つ先に急降下を開始した直枝が、高らかに叫びながら九九式二号二型改の射撃を浴びせ、曳光弾の真紅の軌跡がキングギドラに降り注ぎ火花を散らす。

直枝が高速でキングギドラをフライパスすると同時に、後続していたクルピンスキーとカタヤイネンが攻撃を開始し、二人のMG-151/20から発射されたM-geshossがキングギドラの巨体で炸裂する。

ブレイク・ウィッチーズが風のようにキングギドラの傍らを離脱すると同時に、ラルとロスマンのロットとルマールと定子のロットが左右からキングギドラ目掛けて突撃し、それぞれが抱える携行火器の射撃を浴びせる。

ラルとロスマンのMG-151/20から放たれたM-geshossとルマールのHS-404の20ミリ弾、更に定子の九九式二号二型改から発射された12・7ミリ弾が雨となって叩き込まれ閃光と火花がキングギドラの巨体に刻み込まれる。

ラル達とルマール達がキングギドラをフライパスした瞬間、アレクサンドラのPTRSTから放たれた14・5ミリ弾が飛来しキングギドラの頭部に直撃する。

ブレイブ・ウィッチーズの攻撃が終わると同時に、ヴェスペとフンメルが放った榴弾と対空砲部隊と装甲部隊の発射した徹甲弾と徹甲

榴弾が降り注ぎ、キングギドラの周辺が閃光と爆煙で覆われる。

「やったか!？」

その様子を確認した直枝が声をあげた瞬間、キングギドラの三つ首が爆煙を突き抜けて出現し、対空砲陣地に向けて稲妻を彷彿とさせる光線を発射する。

弾薬が誘爆し吹き飛ばされたZIS―53の砲身が空中に吹き飛び、爆風と破片が操作要員を薙ぎ倒して行く。

FLAK41の陣地を襲った光線は陣地を舐めるように蹂躪し、陣地に展開する6門のFLAK41をねじ曲がった鉄屑の山へと変えてしまう。

「…あれだけの攻撃が…効いていないというの？」

日頃冷静な筈のロスマンが驚愕の表情を浮かべて呟く中、キングギドラは攻撃の矛先を装甲部隊に向ける。

射撃壕に展開する装甲部隊を高みから見下ろすキングギドラの口から三条の稲妻が迸り、雷となって装甲部隊を強かに撃ち据えて行く。砲塔天涯を穿ち抜かれたパンテルG型が搭載弾薬の誘爆によって爆砕され、エンジンを破壊された?号H型から黒煙が立ち上る。光線の直撃を受けて爆砕されたT―34―85の巨大な砲塔が空中に吹き飛び、残骸となったM4A3E8を紅蓮の炎が覆い尽くす。

キングギドラは勝ち誇った様な咆哮をあげると三つの頭部から光線を発射しつつ前進を続け、破壊された戦車や高射砲の残骸が空中に舞い、爆煙が周囲を埋めて行く。

装甲部隊は射撃壕から離脱すると機動射撃で反撃を行い、生き残った高射砲部隊と後方の自走砲部隊も猛烈な支援射撃を実施するがキングギドラの金色の巨体は降り注ぐ砲弾を蹴散らすように前進を続け、発射された光線がヴィーキング装甲師団と第1親衛戦車軍の戦力を殺ぎ潰して行く。

「畜生!!好き勝手させてたまるかよ!!」

地上の様子を見た直枝が怒声と共に攻撃を実施し、残るブレイブ・ウィッチーズのウィッチ達も懸命の攻撃を続けるが、キングギドラ

は降り注ぐ曳光弾の雨に対して煩わしそうに首を降る程度の反応しか見せず、その侵攻は止まる気配を見せなかった。

そんな状況の中、ルマールと定子のロツテはキングギドラの背後に接近すると激しい銃撃を与え、そのまま低空飛行で離脱を行っていた。

「このままじゃ……」

焦燥感にかられた呟きをもらしていたルマールだったが、その視界の片隅にキングギドラに捕捉されつつある？号H型の小隊の姿が飛び込んで来た。

「やらせない！！」

ルマールはそう呟くとクワドラ12Z―89の出力を急上昇させてキングギドラと？号H型の間に我が身を入れ、発射された稲妻状の光線を渾身のシールドで受け止めた。

「……っ……な、なんて威力なの……つくうう！！」

凄まじい光線の威力を受け止めたルマールの全身に今まで経験した事が無い程強烈な負荷が襲いかかり、ルマールの口から苦痛混じりの声がもれた。

光線とせめぎあうシールドから何かが軋むような異音が発せられ、急激な魔力消耗によってクワドラ12Z―89が悲鳴の様なエンジン音をあげる中、ルマールは懸命にキングギドラの光線を押し止め、？号H型を離脱させる事に成功した物のその場に釘付けにされてしまった。

「ルマールさん！！」

ルマールの窮状を目にした定子は九九式二号二型改の射撃を浴びせてキングギドラを牽制しようとしたが、キングギドラは降り注ぐ曳光弾を物ともしない様子でルマール目掛けて新たな光線を発射した。

「……っああっ！！」

新たな光線の衝撃にルマールの噛み締めた歯の間から苦悶の喘ぎがもれだし、それと同時にシールドの一部にヒビが発生し、瞬く間にシールド全体を覆い尽くして行く。

「ルマールさん!!」

定子が悲痛な叫び声をあげた瞬間シールドが粉碎され、吹き飛ばされたルマールが大地に叩きつけられてしまう。

「っが!!…あっ…くっ…」

叩きつけられる直前に残り少ない魔力を全身に纏わせて致命傷だけは免れたものの、地面に叩きつけられた衝撃でV G・39 b i s 2 が弾き飛ばされ両脚が強制的に現実世界に戻され地面に投げ出され、全身を駆け巡る衝撃にルマールの口から悲鳴が飛び出す。

地面に叩きつけられたルマールは薄れ行く意識を必死に保たせながら起き上がろうとするが、身体はピクリとも動かず地面に横たわったままであった。

(う、うごけな…)

ルマールが苦し気な表情を浮かべながら起き上がろうとしていると、耳に重々しい脚音が響き地響きによって打ち据えられた身体が震わされる。

(……う、嘘)

接近してくるキングギドラの姿を目にしたルマールの瞳に絶望と恐怖の色が浮かぶ、起き上がって逃げようとしても身体は殆ど動かず、キングギドラはますますルマールの元へと近付いて来た。

(……定子さん、ごめんなさい…)

キングギドラが間近に迫りその咆哮が周囲を揺さぶる中、ルマールは胸中で愛しい女^{ひと}への別れを告げ、キングギドラはどっしりとした後脚を掲げてルマールのいる周囲を踏み潰そうとした。

ルマールが両目を閉じた刹那、凄まじい咆哮に混じって飛び込んで来た誉二一型の聞き慣れたエンジン音が鼓膜を揺さぶった。

ルマールが反射的に瞳を開くと、誉二一型の出力を限界にまで上昇させて急降下して来た定子が自分に向けて手を伸ばして来るのが確認された。

(定子さん!)

それを確認したルマールが胸中で驚きの声をあげた瞬間、定子の手

がルマールの上着を掴み取り渾身の力でたおやかな肢体を引き上げる。

定子は、浮き上がって来たルマールをその腕でかいなかき抱くと高速でその場を離脱していき、その直後に今までルマールが横たわっていた地点がキングギドラによって踏み潰される。

「……定子さん」

「よかった」

ルマールが掠れた声をあげると、定子が安堵の表情を浮かべながら言葉を発した瞬間、定子のインカムに直枝の叫び声が飛び込んで来た。

「定子！！後ろだ！！」

直枝の言葉を受けた定子が後方に視線を向けると、キングギドラから放たれた稲妻状の光線が雷光となって襲いかかって来た。

「しまっ……」

定子は咄嗟に魔導シールドを張ってキングギドラの光線を防ごうとしたが、桁違いの威力の光線を完全には受け止めきれずにルマールと一緒に地面に叩きつけられてしまうが、定子は叩きつけられる寸前に体勢を変えて自分の身を楯としてルマールが叩きつけられるのを防いだものの、その代償として自身の身が大地に叩きつけられてしまう。

「……ッガハッ……！」

背中を痛打された定子は苦痛の声をあげながら意識を手放してしまふが、その手はルマールの身体を離さない様に固く抱き締めていた。

「……さだ……こさ……ん……」

ルマールは気絶した定子の名前を掠れた声で呼ぶと、蓄積されたダメージによって定子の腕の中で意識を失ってしまう。

キングギドラは凄まじい咆哮をあげると二人に向けてトドメの光線を発射しようとしたが、何かに気づいた様に動きを止めると三つ首を後方に向けた。

「……てめえ、ふざけんなよ……」

黒曜の瞳に怒りの光を宿した直枝が静かに言葉を吐き出すと、それに呼応するように光り輝くシールドが具現化し、その光度を増していった。

自身の魔力の殆どをシールドに集中させた直枝は誉二一型の出力を上昇させると、キングギドラ目掛けて突撃を開始した。

自身を弾丸として突撃してくる直枝に対してキングギドラは巨大な咆哮をあげると、光線を発射

する代わりに翼を巨体の正面で交差させて直枝の突撃を受け止めた。極限まで魔力を込めたシールドと翼が激突して激しい火花が飛び散り、誉二一型が猛然と唸りをあげて直枝の肢体を推し進めようとするが、キングギドラの翼は小揺るぎすら見せず、直枝の全身を食い止めてしまう。

「ち……くしょおっつ!!」

直枝が叫び声をあげた瞬間、交差された翼から三つ首が姿を現し巨大な咆哮をあげる。

「な、なめんなよ……まだ……ッグアアッ!!」

直枝が怒りの声をあげようとした瞬間、交差されていた翼が一気に展開され猛烈な襲撃を浴びた直枝の肢体が大地に叩きつけられる。

「ッグハッ!!」

全身を強打された直枝が苦悶の声をあげて気を失うと、キングギドラは気絶した直枝達を見下ろしながら勝利の咆哮をあげた。

上空

「……まあ、この世界の技術レベルならこの程度だな……」

モニター画面で一連の状況を確認した男性はそう呟くと、傍らの副官に視線を向けて言葉を続けた。

「戦闘データ収集はこれくらいで良からう……キングギドラを帰還させる。」

副官はその言葉に頷くと、コンソールの操作を開始した。

ドゥーデルホーフ高地

勝利の雄叫びをあげたキングギドラは、装甲部隊の砲撃の中、翼を羽ばたかせて強烈な風を巻き起こしながら浮かび上がり、北に向けて飛び去って行った。

「逃がすか！！」

ラル達は直ぐ様追撃を開始したがキングギドラはウィッチ達を嘲笑うように速度を上げると、あっという間に蒼空の彼方へと消え去って行った。

「何て速度なの……」

ロスマンが唇を噛み締めながら呟いた傍らで遠ざかるキングギドラを見据えていたラルは、厳しい表情で頷きつつ口を開いた。

「……残念だがここまでだな、各自戦闘態勢を解除し基地へ帰投する。」

帰投命令を下したラルは地上部隊との交信を行っているアレクサンドラに視線を向けながら言葉を発した。

「ナオ達と地上部隊の様子はどうなっている？」

「ナオさん達は、衛生隊が収容して基地へ搬送中よ、かなりの重傷だけど命に別状は無いみたいよね……」

安堵の表情を浮かべながら応じたアレクサンドラだったが、直ぐに表情を厳しくさせつつ報告を続けた。

「地上部隊は甚大な被害を受けているわ……ヴィーキング装甲師団、第1親衛戦車軍共に50輜近くの戦車を喪失した模様よ、対空砲陣地は約4割が壊滅させられて高射砲50門以上を破壊されているわ……」

アレクサンドラの言葉を受けたラルは、沈痛な表情を浮かべながら頷くと黒煙漂うドゥーデルホーフ高地に視線を向けながら口を開いた。

「……完敗だな」

「……ええ」

アレクサンドラが暗い表情を浮かべながら頷いていると、ラルのインカムに基地からの緊急連絡がもたらされた。

「こちらラル、どうした…何だと！精細は…ああ、よし、直ちに帰投する。」

ラルが緊迫した表情を浮かべながら通信を終えると、アレクサンドラに向けて口を開いた。

「ライン河にも謎の巨大生物が出現したらしい」

「なんです…て」

衝撃的なラルの言葉に受けたアレクサンドラが驚愕の声をあげ、ラルは小さく頷きながら言葉を続けた。

「直ちに基地へ帰投する。」

ラルはそう言うと言いつつ直ちに帰投命令を下し、それを受けたブレイブ・ウィッチーズの隊員達は、力無く頷くと黒煙に包まれるドゥーデルホーフ高地上空を後にした。

凶刃の魔龍・強襲！！ライン防衛線1…異形の龍…

ペテルブルグ上空

「キングギドラ、離脱を完了しました。ダメージは軽微、想定範囲内です。」

副官の言葉を受けた男性は小さく頷くと、後方の統制官に視線を向けながら口を開いた。

「他の怪獣達の様子もご覧になりますか？」

「ああ、一応確認しておこう…」

統制官の言葉を受けた男性が目配せを行うと、副官は即座にコンソールを操作してモニター画面の切り替えを行った。

カールスラント・シュミット周辺

1944年10月中旬に実施され最終的に失敗したライン空挺突破作戦（マーケットガーデン作戦）によって奪回されたカールスラント北西部の地方都市シュミットとその周辺地域は、作戦失敗の結果構築されたライン防衛線を補強する為の突出部とされた。

漸く奪回した故国（一部）を防衛する為、カールスラント陸軍は精鋭部隊の装甲教導師団^{パンツァー・レーア}を派遣し、リベリオン陸軍の第28歩兵師団^{ブラッディ・バスケッツ}と共にシュミットとその周辺に防衛ラインを構築していた。

シュミット近郊の小高い丘に設けられた師団司令部には前線からの急報がひっきりなしにもたらされ、司令部要員が緊迫した表情でその処理にあたっていた。

「教導装甲偵察大隊より緊急連絡、突如出現した巨大生物は第28歩兵師団の防衛線を突破し更に前進中、大隊は第2防衛ラインに後退するも巨大生物の攻撃により大隊のルクス（？号戦車L型）3輦が破壊されたとの事です！！」

「装甲教導連隊第1大隊及び第2大隊配備を完了！第3大隊の展開も間もなく完了します。」

「リベリオン装甲部隊、第2防衛ラインに後退完了しました！！」
次々にもたらされる報告を受けた装甲教導師団長フリッツ・バイエルライン中将は表情を険しくさせながら口を開いた。

「装甲教導連隊及びリベリオン装甲部隊の全力で防衛ラインを死守する、教導装甲砲兵連隊はリベリオン砲兵部隊と共に火力支援を実施せよ！ウィッチ隊への緊急支援要請はどうなっている？」

バイエルラインの言葉を受けた参謀長は表情を曇らせながら言葉を返した。

「セダンの第506統合戦闘航空団ノーブル・ウィッチーズは、ネーデルラント方面に出現したネウロイ並びにネウロックと交戦中、デイジョン駐留の別動隊と他部隊のウィッチが急行中です。」

参謀長の言葉を受けたバイエルラインが頷く事で応じていると、師団司令部の前にキューベルワーゲンが停車し、装甲教導師団が所属する第5装甲軍を指揮官で前線視察を実施していたハツソ・フォン・マントイフェル大將が副官と共に降車し司令部へと歩を進めて来た。
「敬礼は構わん、フリッツ状況はどうなっている？」

マントイフェルは敬礼しようとする周囲を制しつつバイエルラインに声をかけ、バイエルラインは顔をしかめさせながらシュミット周辺の地形図を示しつつ口を開いた。

「30分程前にシュミット周辺のヒュルトゲンの森に防衛ラインを敷くりベリオン第28歩兵師団より、正体不明の巨大生物が突如出現したとの報告がもたらされました。出現した巨大生物は同師団の攻撃を物ともせずに前進を開始し、防衛ラインを突破し更に前進を続けています。現在我が師団は装甲教導連隊と後退してきたリベリオン装甲部隊を防衛ラインに展開させ迎撃態勢を整えています。」

「ネウロイでは無く、正体不明の巨大生物だと！？」

バイエルラインの報告にマントイフェルが困惑の声をあげると、バイエルラインも同様の表情を浮かべつつ頷くと言葉を続けた。

「第28歩兵師団からの報告によれば全長100メートル以上の二足歩行恐竜型の巨大生物であり、生物と機械があわさった様な特異な外見をしているとの事です。」

「特異な外見……」

マントイフェルが思案顔のまま呟く間にも次々に報告が行われ、防衛ラインに部隊が展開した事が報告された。

「閣下、防衛態勢が整いました。」

バイエルラインがそう伝えたと、マントイフェルは頷くと入口を示しながら言葉を発した。

「外へ出てみよう、その巨大生物を確認する必要がある……」

バイエルラインは、その言葉に頷くとマントイフェルと共に司令部を出ると隣接する砲兵隊の観測所へと移動した。

マントイフェルとバイエルラインが幕僚達と共に巨大生物が進攻してくる方角に視線を向けると、その巨大生物があげたと思われる咆哮らしき音が風に乗って彼等の鼓膜に到達した。

マントイフェル達が双眼鏡をその方向へ向けると、視界に鬱蒼と立ち並ぶ木々を薙ぎ倒しながら前進してくる異様な外見の巨大生物の姿が飛び込んできた。

メタル・ブラックの鎧のような外皮に覆われた巨体が陽射しを浴びて凄惨な輝きを放ち、背中に並ぶ三列の背鰭が前進する動きにあわせてユラユラと不気味に蠢いていた。

頭部には両脇から鋭利な横刃と嘴を彷彿とさせる口が存在し、幅広の単眼が毒々しいまでに鮮やかな真紅の輝きを放ちつつ周囲を見下ろしていた。

異様なその外見の中、最も異質で禍々しいのは両腕と腹部であろう。両腕の先には緩やかに湾曲し全長の三分の一程もある巨大な鎌が存在し、腹部には鋸の刃のような鋭い刃が一行に並び、陽射しを浴びて凄惨に輝いていた。

「何てヤツだ……」

巨大生物の姿を確認したマントイフェルが双眼鏡を構えたまま驚愕

の眩きをもらし、バイエルライン達も驚愕の表情を浮かべながら前進を続ける異形の龍を見詰めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3507s/>

怪獣大戦争 1945

2011年6月12日06時36分発行